

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸ゼミ

指導教員：准教授 船戸修一

参加学生：金田鈴音、小竹桃佳、鈴木義人、中野七海、鈴木晴香

1. 要約

昨今、日本の中山間地域では、人口減少・高齢化が進行する集落を「限界集落」と表現する傾向にある。この用語は、大野晃（農村社会学）の提唱で「集落人口の半分以上を65歳以上が占め、社会的共同生活の維持が困難にある集落」と定義している。この「限界集落論」は、集落住民の年齢構成を重視している。しかし集落住民は単独で生活しているわけではなく、集落外に転出した子ども——以下「他出子」とする——が実家の生活支援を行っている。つまり集落を越えて家族関係が維持されている。そうすると集落住民が高齢化しても、そう簡単に集落が消滅することはない。そこで船戸ゼミでは、集落の存続性を住民の年齢構成ではなく、集落を出た子どもの居住場所・帰省頻度・集落とのかかわり方から判断すべきと考え、浜松市天竜区佐久間町のY集落において調査を実施した。具体的には、Y集落の他出子13人に聞き取りを実施し、実家・集落とのかかわりや帰省に対する考えについて調査した。またY集落において毎年7月に実施している一斉草刈り「盆道づくり」のチラシ（以下の添付資料参照）を作成し、Y集落の他出子ならびにその子ども（Y集落の親から見ると孫）に対して配布し、他出子が集落と関わる機会を創出した。

2. 研究の目的

他出子の先行研究に対して、以下2点の疑問が存在する。第1に、他出子論の主張に対する疑問である。「農村社会学」を中心とした先行研究において、他出子は出身集落の近隣に居住していた場合、帰省を通じて集落や実家を積極的に支援する存在と位置付けられてきた。しかし、他出子の帰省を地理的条件のみで判断することが可能か否かは不明である。第2に、他出子への調査方法に対する疑問である。先行研究において、他出子本人を対象とし、質問紙による調査が行われてきた傾向にある。しかし、質問紙調査では他出子の詳細な意見を把握することができない。上記2点の疑問を踏まえ、本報告は他出子の帰省に対する捉え方を、他出子本人に対する聞き取り調査によって分析する。

3. 研究の内容

Y集落は、標高約400～500mに位置し、人口は8人（5世帯）、高齢化率は75.0%である（2019年8月現在）。聞き取り調査は、Y集落の他出子全員（13人）を対象とし、2019年8月から実施した。調査内容は、実家・集落とのかかわりや帰省に対する考えである。調査はY集落住民（親）に許可を得た上で、各他出子に連絡を取り依頼している。以下では、既に調査を実施した「A家」と「B家」の帰省に対する考えを概観する。調査結果は「①他の兄弟との役割分担について」「②共同作業・祭礼への参加について」「③実家の将来について」の3つの文脈からまとめた。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

浜松市天竜区佐久間町のY集落をとりあげ、その他出子に対して実家・集落とのかかわりや帰省に対する考えについて聞き取り調査を実施し、その結果から地域づくりの方策を構想する。

(2) 実際の内容（A：予定どおり）

以下、A家について述べる。A家は両親2人（共に70代）がY集落に居住しており、父親は自治会長を務め、集落の中心的役割を担っている。A家の他出子は、長女（50代）・長男（40代）・次男（40代）であり、今回は長女・長男の調査結果を取りあげる。

まず長男は、①に関し「家族で決定すべきことがある際、兄弟・親が自分の顔を見ている」と述べた。②に関し「共同作業は参加しても良い」「祭礼は他出後も複数回参加し、2018年度は自分の子どもと参加した」と述

べており、集落行事の参加に対し、好意的な姿勢を示す。③に関しては「次男がY集落外に自宅を建設した際、自分が実家を継がざるを得ないと感じた」「Y集落存続の鍵を握るのは自分たちだが、考えないようにしている」と述べた。

次に長女は、①に関し「話し合っていないが、役割分担などで他の兄弟と暗黙の了解が存在する」と述べた。②に関し「現在は嫁ぎ先の共同作業を優先している」、③に関し「自分は実家よりも嫁ぎ先を優先すべき」との語りが得られた。

以下、B家について述べる。B家は、2年前に手術を経験した父親（90代）がY集落で1人暮らしをしている。B家の他出子は、長男（70代）・長女（60代）・次男（60代）・三男（60代）・次女（60代）であり、長男が週5日Y集落に通い、親の世話をしている。今回は長男・次男・次女の調査結果を取りあげる。

まず長男は、①に関し「自分が犠牲となって仕事を早期退職し、親の世話をすれば良い」と述べ、②に関しても「父が出席できないためB家の代表として共同作業・祭礼に参加する」と語った。また③に関して「親から家を継いでほしいとは言われていない」と述べた。

次に次男は、①に関して「親の世話は長男が自然に開始したことであり、口出ししない方が良い」と述べた。一方、②に関しては「共同作業に参加しても良い」と述べ、参加に前向きな姿勢を示した。③に関して「Y集落の実家の管理は長男に任せようと思う」と述べた。

さらに次女は、①に関して「親の世話は長男が必然的に開始したこと」「盆・正月の帰省時は嫁ぎ先の家に挨拶し、その後自分の家に行く」と述べた。②に関して「共同作業は担い手が減少しており参加したい」との語りが得られた。③に関して「Y集落の実家は居住する場所ではなく帰省する場所だ」と述べた。

以上5つの語りを踏まえ、他出子の帰省に対する考え方に影響を与える要因を検討し、その過程において「他出子の続柄」に着目した。具体的には「長男」「長男以外の兄弟（姉妹）」に分類し、A・B家の語りを分析した（表1）。結果、長男は「長男の規範」に基づき、実家への帰省に対して、責任感・義務感をもつ傾向にある。一方、長男以外の兄弟は、実家に対する責任感が長男よりも軽く、他家に嫁いだ女性は実家より嫁ぎ先を優先する傾向にある。以上より、長男は「帰省」という行為を通じ「実家を担う」責任を認識している。

ただし、同様の続柄の他出子であっても、A・B家の長男の考え方に差異が見受けられた。その要因として「親の健康状態」があげられる。具体的に、親の介護が必要でない状況において、長男は将来自分が果たすべき「家を担う責任」を感じつつ、責任から逃避したいとの葛藤を抱える。一方、親の介護が必要な状況に直面した場合「家を担う責任」を果たす必要性に駆られ、自己納得し、実家・集落を支援する傾向にある。以上より、実家の中心的な担い手に「ならざるを得ない」状況に直面した場合、長男は「長男としての規範」を内面化し、規範に求められる「長男」として振る舞う。このように長男は「自分の意志」と「長男としての規範」との間で葛藤している。

表1 他出子の続柄と帰省に対する考え方の違い

	A家	B家
長男	<ul style="list-style-type: none"> ● 長男としての規範を意識 <ul style="list-style-type: none"> ・ 次男がY集落外に自宅を建設した際、自分がY集落の実家を継がざるを得ないのでは、と感じた 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「犠牲」になって親の世話を実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ 親の世話のため早期退職を選択 ・ 他の兄弟には頼まなかった
長男以外の兄弟・姉妹	<ul style="list-style-type: none"> ● 「A家の娘 < 嫁ぎ先の妻」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 現在、自分は実家よりも嫁ぎ先の家のことを優先すべき ・ 緊急時の親の安否確認は長女が担当するとの了解あり 	<ul style="list-style-type: none"> ● 実家の責任者は「長男」 <ul style="list-style-type: none"> ・ 長男は早期退職したので世話を開始したのでは？ ・ Y集落の実家は長男に任せる ・ <u>自由気ままに帰省する</u>

表2 親の健康状態と長男の帰省に対する考え方の違い



(3) 実績・成果と課題

今後、他出子の実家を支援し、集落とのかかわりを増やすことによって集落を維持していく仕組みを構想する必要がある。そのためには課題が2点あげられる。第1に、調査対象である他出子のサンプル数を増やすことである。そうすることによって多数の他出子を類型化できる。第2に、他出子の考え・行動が変化する契機を探ることである。今回、他出子の続柄および親の健康状態に着目したが「どのような契機に」「いかなる要因が」帰省に影響を与えるのか、詳細に調査する必要がある。

(4) 今後の改善点や対策

次年度もY集落の他出子への調査を継続しながら佐久間町全体の他出子についても調査を進め、そのネットワークの構築を図っていきたい。

(5) 地域からの評価

調査対象を地域住民だけでなく、他出子まで広げることで、新たな視点からの地域づくりの可能性が見えてきている。しかし、課題や改善点にもあるように、サンプル数が少なく、実態を踏まえた具体的な解決策には至っていない。そのため今後は、より多くの他出子への調査を実施し、集落の枠を超えた他出子ネットワークの形成など、他出子が地域づくりにかかわり続けられる仕組みを構築してほしい。また、この調査活動の成果や課題が、一部の地域住民や他出子だけにとどまることなく、佐久間地域全体に広がることを期待する。【浜松市市民部市民協働・地域政策課 山下貴帆】

5. 地域への提言

以上の調査結果から集落存続の方策として以下2点が提言できる。第1に、他出子が集落住民と関わることである。具体的には、集落住民に交通手段を提供したり、買い物を代行したりすることである。中山間地域のムラは、地縁・血縁などの人間関係を基盤としているため、集落住民同士の相互扶助が期待できる。第2に、他出子が集落行事に関わる機会を創出する必要性である。具体的には、集落の共同作業・祭礼に参加することである。現在、集落住民のみで実施している集落行事を他出子と取り込むことにより、人手不足の解消、活気や賑わいの創出、文化の継承が期待できる。以上2点から、他出子と集落住民との人間関係を築いていくことにより、他出子が集落の担い手となる。今後、船戸ゼミでは、調査を通じ得られた知見を基盤として、集落存続の方策を集落住民と共に実践していきたい。

Y集落の 盆道づくり

お手伝い
募集！

日付：2019年7月7日(日)

8時に「Y集落集会所」集合／11時終了予定

持ち物：着手・汚れてもいい服

参加希望の方は6月30日(日)までに

ご実家へ連絡してください。



Y集落出身の皆様へ。

私は、静岡文化芸術大学の教員の船戸修一というものです。突然のお便り、失礼いたします。私は、大学で農山村の集落について研究をしています。昨年、私と学生たちで、Y自治会のご協力のもと、Y集落を離れて暮らす子どもさん、お孫さんを対象にアンケートを実施しました。この結果は、今年2月11日(月・祝)に自治会長のAさん宅で、住民の皆様に発表させていただきました。アンケートへのご協力、ありがとうございます。このアンケートでは、「Y自治会のためにお手伝いをしたい」という回答が数多くありました。しかし、実家のお手伝いのために帰省される場合が多く、自治会の活動に参加する機会があまりないという意見も見られました。そこで私たちは、Y自治会のご了解のもと、毎年7月にY集落で行われている「盆道づくり」の案内を作成しました。Y集落を離れて暮らす皆様とY自治会の皆様がつながりを持ち、きっかけになれば、幸いです。私と学生も、昨年からY集落の「盆道づくり」に参加し、今年もお手伝いする予定です。皆様も「盆道づくり」のお手伝いに参加しませんか？

2018年7月1日(日) Y自治会と船戸ゼミの交流会